

ペユダヤ人の前で、パウロが証ししたのは、ダマスコにおけるキリストとの出会いでした。まばゆいばかりの光で目が見えなくなった彼は、助けられてダマスコに入ったのです。



## 1. 目からうろこのようなものが落ちて (12～14節)

① アナニヤ (12) 「すると、律法を重んじる敬虔な人で、そこに住むユダヤ人全体の間で評判の良いアナニヤという人が、」

敬虔なキリスト信者でアナニヤという人がいました。彼はダマスコのユダヤ人の間で、評判の良い人物でした。実をいえば、彼のところに主は語りかけられて、サウロというタルソ人がユダの家にいるので訪問しなさいと命ぜられていたのです。

② 見えるように (13) 「私のところに来て、そばに立ち、『兄弟サウロ。見えるようになりなさい。』と言いました。すると、そのとき、私はその人が見えるようになりました。」

そこで、アナニヤは促されるままに、真っすぐという街路にサウロ (パウロ) を訪ね、彼に言ったのです。「兄弟サウロ。見えるようになりなさい」。サウロはこれまでの三日間、目が見えず、飲み食いもしていませんでした (9:9)。しかし、アナニヤの「見えるようになれ」という言葉で、パウロはその時、目からうろこのようなものが落ちて見えるようになったのです。パウロはこの節において、アナニヤがはっきりと見えるようになったと証しています。

③ みこころを知らせる人に (14) 「彼はこう言いました。『私たちの父祖たちの神は、あなたにみこころを知らせ、義なる方を見させ、その方の口から御声を聞かせようとお定めになったのです。』」

アナニヤは、主にサウロは自分たちクリスチャンを苦しめた人であることを訴えました (9:13)。しかし、そのことも踏まえた上で、主は以下のことを伝えるようにアナニヤに言われたのです。すなわち、第一に、父祖の神はパウロに御心を知らせるということ。第二に、義なる方であるイエスキリストを見させること、第三に、その方ご自身から直接に御声をお聞かせになることを定められた、ということです。

## 2. パプテスマの促し (15～17節)

① その方のために (15) 『あなたはその方のために、すべての人に対して、あなたの見たこと、聞いたことの証人とされるのですから。』

さらに、アナニヤは、パウロがイエスキリストのために、多くの人々に、主についての宣教をすとも伝えたということです。つまり、パウロが見たことや聞いたことの証人となっていくということでした。

② 何をためらって (16) 『さあ、何をためらっているのですか。立ちな。その御名を呼んでパプテスマを受け、自分の罪を洗い流しな

さい。』」

アナニヤは少しためらっているパウロに対して促したというのです。「さあ、何をためらっているのです。すぐに立ちなさい。」理屈と行動が一体であるパウロでしたが、まだ事の全体像を受けとれていなかったのでしょうか。ところがアナニヤが伝えることは具体的でした。つまり「その方、イエス・キリストの御名を告白して、バプテスマ（洗礼）を受けなさい。そして、あなたが行ってきた罪を洗い流していただきなさい」というのでした。

このようにして、パウロはダマスコでバプテスマを受け、食事をして元気になったのでした(9:18,19)。

- ③夢ごごちになり(17)「こうして私がエルサレムに帰り、宮で祈っていますと、夢ごごちになり、」

ここからは、パウロ自身の経験に移ります。彼はその後にエルサレムに帰って、宮で祈っていたのです。もちろん、イエス・キリストの御名で祈りをささげていたのです。すると夢ごごちになったというのです。

### 3. 異邦人伝道への主の言葉(18~21節)

- ①エルサレムから離れよ(18)「主を見たのです。主は言われました。『急いで、早くエルサレムを離れなさい。人々がわたしについてのあなたのあかしを受け入れないからです。』」

主の与えられた「夢ごごち」のなかで、パウロは主を見たのです。その時主は、「急いでエルサレムを離れなさい。エルサレムのユダヤ人たちは、パウロの証しを受け入れないからだと言われというのです。」

- ②ステパノ迫害にも加わった(19~20)「そこで私は答えました。『主よ。私がどの会堂でも、あなたの信者を牢に入れたり、むちを打ったりしていたことを、彼らはよく知っています。』またあなたの証人ステパノの血を流されたとき、私もその場において、それに賛成し、彼を殺した者たちの着物の番をしていたのです。』」

しかし、パウロには何となくユダヤ人たちは自分を悪くは思っていないと、思い込んでいました。なぜなら、彼はかつてクリスチャンを迫害してきたし、あのステパノが殉教した時にも、その場において、迫害に賛成して、迫害者たちの着物の番をしていたくらいなのだから、そんな自分を敵視することはないだろうと思っていたのです。ところが、事実は違っていました。ユダヤ人たちは彼を殺そうとしていたのです(9:29)。

- ③異邦人に遣わす(21)「すると、主は私に、『行きなさい。わたしはあなたを遠く、異邦人に遣わす。』と言われました」

主のご目的は、単にパウロをエルサレムから離れさせることではありませんでした。主は、彼に「行きなさい。」と言われて、驚くべきことを命じられたのです。それは、「あなたを遠く、異邦人に遣わす」ということでした。彼はタルソ生まれですが、ユダヤ人ではない、異邦人にキリストのことを伝えるとは思ってもみないことだったのでした。

《結論》パウロはダマスコ途上でキリストに出会った後に、あの光で目が見えなくなっていました。そこに遣わされたのがアナニヤでした。彼から「見えるようになりなさい」と声をかけられて、彼は見えるようになりました。新しい生活、働きの第一歩でした。アナニヤからは、パウロが選ばれた人であり、証人となる人だから、すぐにバプテスマを受けることを勧められ、彼は、受洗しました。さて、エルサレムに戻って、宮で祈っている時に、彼は夢心地になり、主を見たのです。すると主は、「早く、エルサレムから離れなさい。人々はあなたの証しを受け入れないからです」と言われました。しかし、このお言葉はパウロにとっては意外なことでした。主のために、突進することを命ぜられるのではなく、いわば逃げなさいと言われたのです。それにユダヤ人たちは、かつてはクリスチャンの迫害者であったことを知っているはずで、酷いことをされるとは思っていませんでした。まだまだ、甘いパウロでした。

実際のところ、彼の命はつけねらわれていたのです。主はその時点で、パウロの命がとられることを望んではおられませんでした。主は、もっと偉大なご計画を持っておられたのです。それは、パウロを異邦人の宣教へと遣わすことでした。まだ異邦人が救われるということが、疑問視されるなかで、異邦人宣教への先駆者として、パウロをお立てになったのです。後になって考えれば、パウロはまさにこの働きにはうってつけの人物でした。ユダヤ人でありながら、タルソ生まれの彼は異邦人のことをよく知っていました。律法についてもガブリエルの下で学び、ギリシャ語を話し、ローマの市民権まで持っていました。かつてクリスチャンを迫害するほどの気概、行動力など、彼は神の選ばれた人であったのです。人間の浅はかな考えをはるかに越えた、「主の偉大なご計画」がなされようとしていたのです。パウロなくして、異邦人伝道は広がらなかつたでしょう。主は初めからすべてご存じだったのでした。

昨日、聖徒研修会が千葉みどり台教会でありました。合間に雑談をしている時に、どなたかがこの教会はいつ建ったのですかと、質問されました。板倉牧師は、27年前ですと答えられました。私は当時のことやそれ以前のこと覚えています。いくつか転々とした後に、現在地にあった古い建物に移りました。一階は自動車工場で、その二階を借りて礼拝をささげていたのです。そして、ついにその土地を買うことになったのですが、谷底のような変な土地でした。だからこそ、価格も周辺より安かったのでしょう。そして、そこに新会堂が建てられたのですが、今やその土地のすぐ隣に大きな街道が通るようになり、そこを通る人の目に教会が目映るようになっていきます。古い建物の時代に誰がそれを想像したのでしょうか。主の素晴らしいご計画でありました。

私達の歩みにも、私達の考えを越えた主のご計画があるはずで、それは人間の見通しを越えたものです。「それはわざわざではなくて、平安与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ」(エレミヤ 29:13)とありますが、自分の知識や経験に頼るのではなく、主を頼りましょう。主の「偉大なご計画」は私達にも必ず備えられていきます。今月、今週も、神に大きな期待をもって歩いていきましょう。